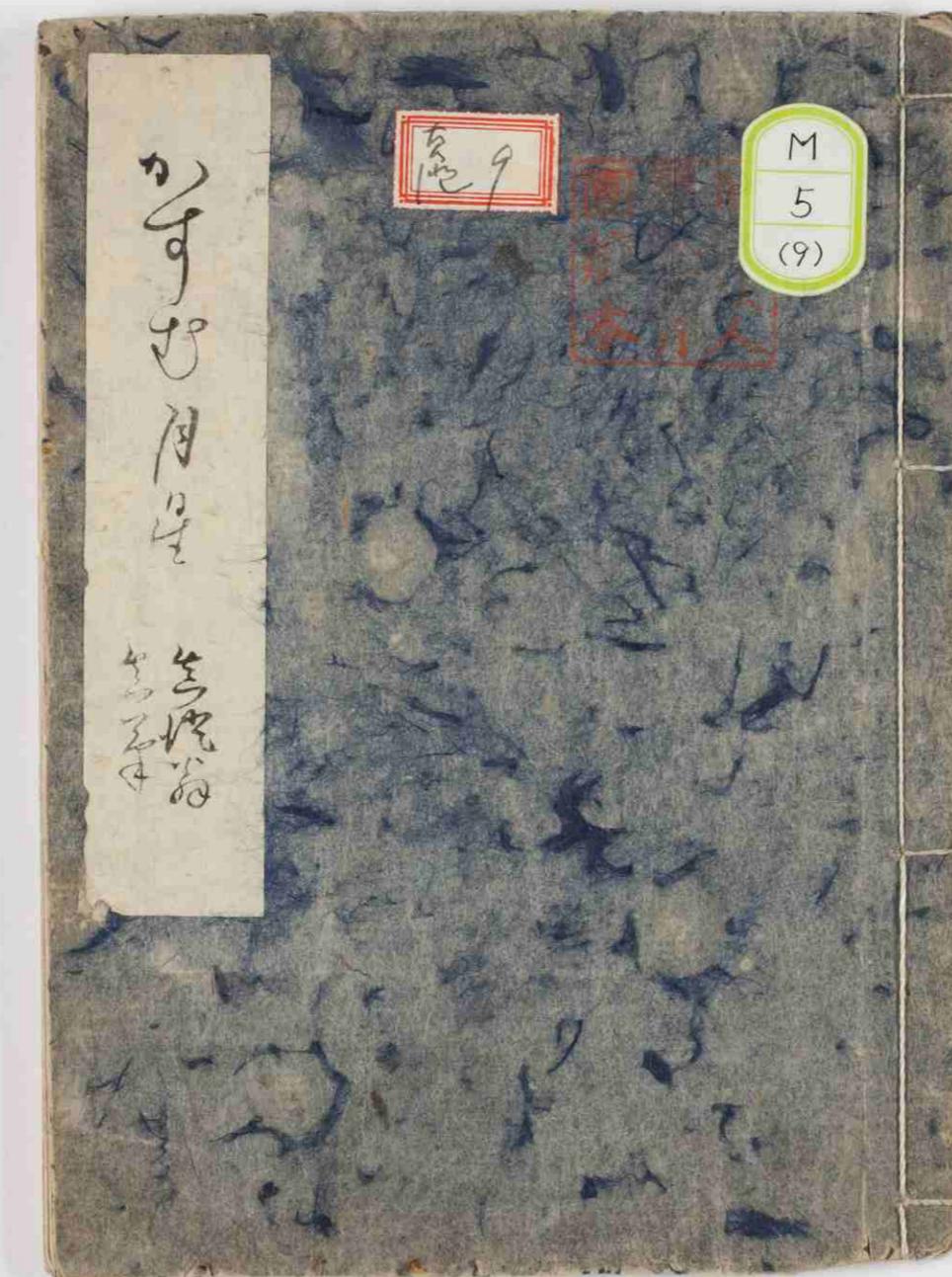


以下 汚れあり

破損あり

1/21



貴樂企のちつちつと、淳代並て高き國が流れ
あ原のうらへと夕ゆれ、暮づけの申ひをもよひ
わきよ雪ゆぬ、津川の白神、嶽そと遙く見ゆすれ
東の蝦夷の國、斯黎弊都、津輕の巣村、坡河の
川、争ひも崎河、うだるし都賀呑門十三の港が遙きうだ
多通毗の沼、う三鹿の浦の西、ふも多通毗の崎、う松前
の陽小白神の磯、うを、深浦小進、改めよ此を神子
山もむく、う、山もむく名をもむく、遠見むく、あくまのう
そりあも蝦夷人の柄家しつんをもくとももむれ、故
舊つ根義、おののりもあそとも、源こもくみみ乃
山、雪ゆぬれ、田はく見度、大内田、やくこく、あ
のとす村の名い、まくまくがもうら、在りしものまく

參

出羽今治君のもとへん政所のとありしより語もあり
 二井用と材木の中に白鶴山倫勝寺と云ふ寺あり
 もと檜山のひらに有母財の色うな蟹子澤と云ふ
 國清寺のひらに有峯巖と云ひありし在天禪師と開山と
 あり黒尊佛とのまゆが在天木像ももあひ西尼門
 又ては此寺にそりをさやみ寺と云ふ永錄七年のとあるも
 いづれの榮へとぞれあひやうの秋田太郎の百両石
 二斗三升と寄れて龜尾山補陀寺の本尊とて明脇
 三補陀寺のハセ宗瑞和尚とゆきし開山してゆきを
 あきよ地主とゆむじ道元禪師の流とぞすとくたゞ
 やうあきよ大樹アリとあつて此事も大銅ニ年いねを頃
 近頃ア蝶美塚とゆれて白骨の出る石の祠小さきある

機織村か事す、柿のぬうと云ふ家を有する者
 文化の門田をかへと男のあひて

ル渡と軒の柿のぬうと云ふ家を有する者
 家のゆきは一村のそとに出れを曾利の因と字ゆる白田
 さふ一本木と、大あられ皂角の樹ゆうだき和銅垂電
 ちよ此樹のあじとて、桐木ハシミとすむつゝ坤
 のつまく合吹板の音詰で細うつ聲せりて日暮つく
 壬三月へとあく雨ゆり晴れど、善城山津明寺と出
 くもてわざしの獅経師、九嶋敏重、成田高橋近藤
 由良山のあんちばもよきし鶴形山をわく、母
 爹の夜久志屋のゆき傳く霧山の林庵とめどりて
 お勘加呂萬智、多溝地と根とて學問長輩とて

らの見ゆの山は、机の上のやうなもんが好き。
あれこれ奉事殿のとよもよも、初聲の玉にあらわす。
こゝへ誰かのふさわしの園の遠くから我がみ見
聞鳥の鳴く声のうへへあき、巨陀須まつらとさう
りそ暖まつてゆく、モ蓮華とすのとほむるの聲
せむるねじりあまあるを。

嘗てよのめのあらもうれしき日をつむぎて
清めのすすき音をきくと、廻りの山へと見る。
蟹澤と田面は、鴨蹟葉樹のうちおきまつる。
以清國寺のものと在天せむるを偲ぶ流のあまき。
女郎頭てそりぬ、尚ぬうさうて、安左比奈^{アシナ}胡麻
烟とす。朝平の護摩火焚うすとおさんむ。僧侶

のうとうせと云とくと、山落と數てく馬蹄マツヂあよ三四里。
岩立イワタケと碑石を乱し世とてくせ物語モノガタリうが哉
うふ箭塙イハコとく柵スルメあひゆ。安倍鹿アミツクル李イチまよひよ。雲
うふありしあひち。蝦夷の毒煙カニシキあひし諭シテのあとも食も
毒氣の水流スルムくさとくすのあらす。こふくの牛ウシせりて
いと多くうんあんきよまもとく。鯛魚人魚、鮒魚鰐
魚スズキは山椒魚サンショウ鳥トリは山椒河鹿サンショウとよのと蛇ヘビあひよ
ううすとく深澤シカツと山中ヤマノミで母翁ムシヨウがゆく。雲谷
嶽タケかほしてと高くづとひとり嶠タケへとぞれ山ヤマとすん
靄モモとすと、云々段霧ツバタマツとくとが言ヒトコトもありう。モ夜
の名去前、津輕、飽田路タマツ、八森ハシマとす。峠カタマと夜を
窪カマで石窓シロカマと不薬師佛ブツとひくと杜良トロコと西雄鹿

山中と白神馬背内みの口もく。音のままでして心
のや寒く吹きすが、四方吹きてもあらず、おもむれを
桐の澤、旭の澤など深谷のそこへ轉る聲の如き。
鳴も出る朝日の方へまきこむけ年
うそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
大越えの門脇の翁されと拂う事もたゞ蠟燭のと
つゆ事にてあらんとぞ、鰐糸の沓作り、夜うそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
ひめくと、公發多まいてゆら、油ナリある人をなぐ
せゆる出谷よりてりて、觀世音の堂あり圓通山
の額、舟和高ハシテ廣大寺と額すつて誰かがと
てし城介實季子某とあるもじを記と申むれど

西行の文慶季の手紙を觀世音庵へ頼ひて、
陽子の事もうかがひて、さうして、此の文書を
前橋へお手渡しとて、小観音の門下として作三格
三百石稻を寄せらるゝ事も、毎も三年と
往てみどり錦とひじきとくふ縫とを交ぬむ
了い北からも潮の主をみて二井田の寺の大木と
考、船の主の櫻とえどあれ、鷹飛浦とい聞唐の本尊と
川舟の宿すよ語る蛇のあたまの寺の本尊とも言ふせき、堂宇
多くて、寺向所の山中を出でて、まよひめばと大なり
あると觀音しつづきのむかうりともいはゆる妻より
まことに流水水と諱の澤とも云ひぬ。

花之以清風爲其根者也。故其葉之繁茂，其氣之芬芳，其香之濃烈，無不與其根之清風相應。

まの清水、やゝかとあれも海藏寺への道筋を
山を下りて、舟を下りて、船を下りて、川を下りて、
つまづく清水寺へと向うとあるひの鐘の音、
ほんの裏で鶴形山から出で、十林長左衛門がおもて
人をお別れして、ヨリ、さあ、わせむらへゆる故のね
廿四日、あくまで、とおもふけれど、今も大鷦鷯
れぞれ、季忌宮守をして、お小階をして、頭
の痛いふきは、集ま、おひそかに酒をくみゆゑのう
おせきおとこひ、初年の茶をまめぬため、おもむき
廿五日、小雪のて、寒い氣を、雪つて、鶴形村を出で、
雀卧澤とゆめあうた、さらなる舟をうひゆく。
早朝の早歎が、うり出でんむだ邊へとおき

まくらぐく、とおもひて、舟つきよひて、おま
瀬の川も水ぬく渡り、おまかし船を、おまくさおまくさ
おじ屋敷、名筑治師ツキナシとひかる。月星とも、月日とも
康平も、阿陪貞任アヘイ・ジョンジンの子、高星タケハヤも、二の子
のふじうら、津軽の藤崎タケザキふじうら、樋ヒの家、室井
高星の子、いや月星の子君カミか、今も高星殿月星殿
と唱つ畠の字あり。おれさんみの君カミのゆゆゆも、さひる
そこ知りともおなじ。お祖母おおじの物語ものがたりとおおじ
おじ老おじ車くるま残のこもしとおじと藤崎タケザキの長吉ナガヨシ川越茂助カワツヨシ・モロトシ
の話はなしをすこしとありして、おりひ出でても、月星の事
より出想でぞう國くにもゆうほくとひづれあつて、そのあつて、
ありつんが、西にし下くだる、冬ふゆ宿しゆくすのあと、おはづけの

れし林平より李原とよと進む打の采瀬のやうすす
合ひゆ梅の宿のゆり名とて正福寺に付之こそと
そ廣く道あるまゝと雖も二八田と云ひてあつて
あらぬちの堂と神と鷦栖ありその御みわらしが
いまと津の阿弥陀川と瀧もあつてすよすと
せう大高相模守康澄の東北村もひきと進むる
道もひきと進むる繪佛師のゆきゆきやまと既
戸皇子代から源と浅淳代の敬正寺ふきをあす
とすあはれども村のむかふりてあらまこととく
の捨まざりとむれぬとあれどもれと避んとほ
うひの四合餅をひきがくと四合より浅合せと宿
在とうる今敵を擣て神と高きらもひと神送りせ

とおん吟哉と子村の出所さるより水西押すれひく
流れひびきへと遠くゆきあひて柳とむすけ
ルもひく、ひま木代河童とひ山にゆづり
ゆづり事と向能代は生うしりと淳代とひ野代とひ
もひ代とひと今のが能代、近き世よりは家作とひ
元龜天正のむすも、苦ぬるれ泉即の屋形の十斗もひ
あじとせひ後で河米代浦能代さうじと米代湊と
もひれ、高比良とて城の址多くあれと阿倍鹿季代築れ
えん村名と鹿野城あり鹿村あり鹿之森と女徳昌庵ととて
あらゆ僧事紀事とくらべられうむと器うる
あらゆ僧事紀事とくらべられうむと器うる
あらゆ僧事紀事とくらべられうむと器うる
あらゆ僧事紀事とくらべられうむと器うる

故金辭の七日そり清代の岡邊すよも四方とも見
わざふ遠すゆきうす雪もあつてかづれども、
つまひの花向影うきのじてあらへ遠す
雪せむれども、伊也生の森の小路でうめく舞を去
原のむらぬくがまへ秋野の沼もけ風情ありはやくりい
坊崎からうねきてうきびらへて賢所と妻チハ大裡田
こゑひ小潮乾田、田屋にて大伴の塘とよまるとおみてゞ千
町の田面水を渡せり、大伴え、草木のれとよまるの
形の靴のかきもとれてもおり、水と魚とこそ、新田中澤
今泉とよまやえ村へ見うきの村とよまる梅の後高
袖籠のすみふ見えぬ物れつむら名を

吉四王の堂小海うつ杉清水清ア流れて神まひやま
檜山の里にありてや構喫つゝあとせりわだをす
八日、季忌宮の御前よりて御のそめめいまと見はる
梅の香もひくよさみへきくらむやくくさくの
あをきれん、と神のもキテ後桂よみづと出で
十日つともくちゆくじりとよと方ゆくまと道をゆく
物詰もゆくよも芳野櫻の多くよとせ盛小松杉のあつま
見みえをみ雪、とせとせや、湖人の良と吉見く見え
とせ、芳野もよと良くすとあことまんくのつて
船にまよひてまよひて山あいのゆうとまく夕附夜おつて
惜しうとまよひて山あいのゆうとまく夕附夜おつて
月の曉夜とあくわくとく

十一日雨あらず晴れと云き、僕師絃師よきと近藤傳吉
以西草野にて新坂峠を傍ひ出で日出ひと見ゆて
世と櫻の多ひやもあけと、あやうとてどろのむねあ
あがくもかたこ、小牧の坂、大牧の澤かと、夜も日も
よ名古もと、きとらしうもむと、秋田統のむな裏
みあが山もと、花多ひや、歌ひあ詩等と、筆を書く
花もみうらじ日をとし、うち歌ひて因と號すして
人のうれ、無此あすしむとましまく田つゝあまく小
聞へて大森のゆみりとまく譽田の神籬ハ杜もと
のむもとれ、花の林小あまが花椋鳥、むほひもく
飛すと、櫻鳥とよとよとよとよと、花の木と、
の名もむくとしげく

五月の日、花のむくらさくへかくも出る羽根も
白い山すみ、栗澤のひとう駕籠、杉澤のむと駕籠、
もとむと屋まで、谷まで谷下、明鳥のゆづと志戸橋の山路
をみ、瀬瀬水底めづと見て森里又やうへて見
渡し、砂子沢の沿よ、あわせかどり茶毗の澤と笑
太谷あゆ中もよし、龕もろいの澤もありむろいにき
かきれりありしもとにして人の頭ひと草の中は在りて
あらすゆゆの力波をせり、鳥帽子長峯のそとせを
遁るやうに連子せりてふりてあらすゆの宿遊高麗
シテ伊ひく常樂寺の薬師堂まで刀開、日の澤川、
かと古城の名と流とまつ風情をうへ、長風堂へむけ
あらす藤氏のいよいよまつてことせひ一見、明の高玉堂

うへりに筆を止めて繪の事に迷ひ、かくかくと絵を引いてゐる。まことに筆が出来ぬ。

十五日つとのてうもとこ嶺眼とよのし章ひく例
やうむすびひく長角城ちく宮野目ふくめい
姫櫻の巣す見一日よ山居の庵小石山はまくとい
とものうちも増えじよんてわくかと花あくわひそて
るありと小坂山房のものとゆきぬのとて垣の神
とせう小町村よとあくとめんととおもひだらふとく
小野小町のうづく清水のとほりよ岩河の山道よとく
鬼首山權現の杜ノ櫻もすくわく

萬人の吟も酒も、萬人水也、萬人歌也、萬人舞也、
花も葉も、梵定山も、の喜び地なるとその山に

加比良祁淵

名高き見ゆる者、從五位下源義家、まみ出羽守だ
と。其事とも、ひくひくして建治の時もあつて、す
こりと、高杉山で見ゆる落合の村と云ふていひ、
をも在りと多く、茎、小茎の多く、落合の面をまぶして、傳
わる。元小鹿の毛を在れど、遠く毒をすられ
て死ぬるに、小雨ぬり身ぬるに、二本松の屋形が
砂子澤のやうふく、かひくはぬのやうに、桃李
を多く生む。春ぬるる田舎の鋤の柄、籠をすらる。遠
漢國のふもと、もくろくさく氣と、鍬斧の名ももつた初
小切とて、男女ともいしめ。花林不うほひ、瑠璃小鳥
かぎを歌うと、ひりと紅じくと、やせ良柿をもと
あれ馬鹿とも、音の碑うちぬ馬をみ、棕島の名も

次登三利山通せ
ひ一馬二取ひと
のあきよとて出
名見る村の名も
多くある
とあくはと笑ふ増浦とす林さんと興五庵とすり
金中宿まで一通の村とす神馬澤のやうなむらと
あうひさとて大り於梅の木多く花がうるゝので香
るくさく雪とうぬ桃梨李の枝とすて林と
まわすもゆづらうてふらて中山とす山路とす灌水
の原と雪と残りあく觀音蓮の花をしとみてけんや
かまとわくのやうびすとおれうえとしうべも佛の名
とそるれ若艸山小をとおもひの高城とす山乃
あうげともと高くうかて師走長峯とす攀登と
鯉河三鞍岬高四山杜山河代アヤロス外山
のうねり人菜種生の聲とそくじとぞくじと
哭く涙く遠山の湖水の原とおもくひづく

あまゆみと風の寒く師もあら名をとるれ
あらむる山路とのせ暖を櫻の皮の桶とつもあら
新玉のゆきとせら、とれども松吹かしとらせ、松瀧
と拂ひ、と毎日包み敲と手とのと作らとす。李時蟠
と越路をよひふてそりあれ、と長坂とよとあら坂中
赤石脂あれと、比内郡守お酒鋪小鹿ると、品子より
種澤とく村井、苗代や兵をとめうと見へ

音響ありて、雨野色の山は大山かと申す。此處
ありのりゆく、桃の山をも跡をも雪中峰の
の椿の木の下、商五清三郎トシ郎と申すが、此處で觀世音
菩薩の堂をもつてある。根元に記した如く、今代の如く不

見あらばアリテハ田吹切ヒモトノ、牛本の笛吹切
タリ、モウレハ吹きともども、一官トヨアテラル。此
作ヒ吹き内ハモウレ歌、吹き手とも吹き手モアリ。
アリテヤ年をモモトニテ、手すりとモウレヒトモ、アリ
ケル。御不まうれ事とモシテ、ソシテ、萬葉の
メロトありけり。また、官生の崎ノうきは、アリケリ。
笛漏の阿遮羅明王小神ノセラヒヨトモ、吹き
口吹西伊ガ十八坂ヒミテ越えて、漏澤ヒテ、あゆきの
御子、うつむか、漏細く度テ、三浦兵庫頭義豊云
在り。浦の城は高也。不當用ヒテ、吹きあれヒテ、モウレヒ
名前。御子、本郷、御坐の門アリテ、もあひて、アリシ
やうの北也。つもヒモトノアリテ、御のまをうに

田井の水ひく大瀬あり塙をまちやむにれどもと傳あれ
義豊三浦介平義明の子也て鎧倉を出で飽田路某り
城ヶ實季しつつ(が)浦の城マツシタをめぐる意ありと云ふ
腹ハラにさりて死とこうせり、妻子三浦の五郎丸義包と
さかへれそを金谷北野の原はうされしは、湊町を背
のちめうあれあらじも充ちしもあらじあまのをも
きこあまきんとぞうそうし、おとをもすろわまじ
の多くを神と肩スカウトて、そぞ社一日市代ヒサシタダとよ
きくよあめ、ゆとりさんとぞ、浦の船を名づく流
らうそく、船機ボートの夕葉、梅のやまとひりうそ
えつ様ヨリ多く、秋の葉の色をきみ、葉の色をみる
無事とみれど、日の下で浦の村マチよりひきよる今又

矢橋元町、浦大町、浦横町、小箱鼻、鎧澤
白水澤、ある村マチをも在り、妻町マチをもあく、色づけ
宿マツリある浦横町の村マチを、兒玉嘉兵衛コウモンとよぶ
つもあら、隣ヤマツチの村マチをもと童コノシタをひれど、フクシ
留主居リヌシタをすと、よしと見、後居アフタシタの僧ソウジンをもあら、行母病
詔マニトめの言詞コトハもともと、人、まねかねあらからしめりと、
えらぬ、めんど、まはれと森マツリをひのひよ因イシ
ゆうのゆう、裏マツリのうそじれ候マツリと、康マツリとすらあり、

廿六日つとめく宿マツリをも、盛岡山東國寺常福院と
古義の真言マニト叶ハタケ花ハナと小やうう焉ハタハタ、高丘の神マツリ
をもてのける難極マツリ小石マツリも羽黒權現マツリと齋マツリひく、とす
じもつね、彌陀マツリ、薬師マツリ、觀世音マツリの種字マツリあり

「アタマを下すほどで切を身落とし大根の五寸のうな
のとちむらさきに引く。山祇の神で赤面の四角の口の
ふたをあわせ梅の花盛りあぐれ掛け走り立つてねぐら人
魚をし桃櫻梨花李花にれとは見ものに遠園の花とも
もあら小見やかにめぐらむとまど崎うちのれどもく
との鶴居小町ぬあ高岡權現と申すががむうのと
副河の神社のひづれのうともとてとて漆川のひづれと尋ぶ
わひづる小城山より獨鉛花立てはらむとてあら神の
鎮座するとも添河の神をさみて保食神さざれを守る
神のもうののまほむはまほむまほむの申すをかう櫻

御城く又のまき、三浦義典の城山と云ふ。辛野目
内記秀盛の城山、木の本の中にはさむの安藤季村の在
里本の古城にて廻り見て田面の葉を以て繪かること多し
まやみ馬うわが人花の林の中かくうす浦のやに山め
麓の里もひと多うむづかふ恩荷の浦よりともうせ
水海ひと小露とお帆よ序帆かひきつゝあても
離れぬ、釣小舟をんなくらうめ

つりの木立の下、かくらとしで梵籟がて渡て直坂を
かりぬ。觀世音の堂である。ゆめ観の木立の
神明村櫻色寺傳ひそく天瀬川の村すまうたす
をも萬助とす。母は元禄の庚辰の年に生れ、百六

とて、今又より其のゆへ浅くも身を離はれど
その身あらりとその手と手あましに萬千か所と
因幡の國はもとより者の妻を云ひ更松原村は住む鋪部
義左衛門文化二年に百十三の翁の室小夜が
百七十三人。うちの内人を上と見ておる。之
のせき枚五十人扶持をみてなう。松平相模安堵
と暮すの生れあれをそぞ家ひうを作れ(きの特)で
うえすもうあるの百両とあまくして足輕下部五人
ウジタヒヒを年金を武藏の都とある因幡の所りの
鋪部義左衛門の子清左衛門百三十も妻の岩(いわ)一
百三十一孫の萬之助百三をみほさひ。九十九度の
平五郎六十。その妻石井五十七曾孫源之助三十七。

文書

古

古孫の源太(やまと)九日の妹(いぐ
は)ハサエ妻(めし)まんの齡(ねり)四十歳(さい)清左衛門夫婦
と源之助(よしのすけ)とも三干枚(さんせんまい)つやつと後(あと)を
正月(せいがつ)十日(じつか)から(から)多く(多く)の被(ひ)ひ中(なか)と(と)きよ
仰(あ)ひしと(と)り。今方(いながた)あや(あや)のつしきと(と)あ(あ)
夫(め)も別れ(べつれ)鶴川(つるかわ)川(かわ)の事(こと)を(を)う(う)解(わか)る(る)
のを(を)う(う)か(か)の地(じ)を(を)五(ご)百(ひゃく)と(と)も(も)い(い)ふ(ふ)
也(や)。されば傳(つた)へ中(なか)納(な)言(ごんげん)の(の)と(と)う(う)と(と)う(う)
印(いん)を(を)持(も)つて(て)外(ほか)館(かん)と(と)う(う)字(じ)の山(さん)海(かい)極(き
く)と(と)う(う)しも(しも)城(じゆ)里(り)の淵(ふち)大(だい)羅(ら)と(と)う(う)網(あみ)と(と)う(う)
魚(うお)を(を)う(う)か(か)の傳(つた)へ中(なか)納(な)言(ごんげん)の(の)と(と)う(う)と(と)う(う)

東北道外館の名
えらばく金成房
津川(つるかわ)を(を)う(う)

古

漆川名鯉川とひ流るゝ事多し。山中爲し
せらむ村石といふ所とすらそくのそんさうとは
やありさん。西山家と藤原與重郎とて城を起
立をとむが、山屋のやまと鹿渕の御より
よし、こまおもへり給へんともあれど名うかんとす。
十七日鹿渕を出でて、もと青山玄舟、近藤忠萬
をもとめひづきもとひづきひづき麿をもとひづき
高嶽山松庵寺にひづきの世より跡村とす。今は在
ちゆう。察心毒鑑和尚と開山。大寺とす。木
精木瓦とて作らる。一本樹とて、やのひのゆゑを
望ま。古屋舗のあても、寺を造つて、極氣せり。

猿田の山室にて、維平、小鹿、大社、毛左
田、伊豆の駒もひ、防を設けて、御子と紀平
多ひ。維平討とぬうとあり、毛左の三才、大名共
へ龍湖、鹿廣、志加の廢されて、毛左山屋とてやん
まのう人の事もみあきり、ひ世と傳す袖う波
左田の桃櫻や、峰くわせ、千葉の豪居はれて、見ゆ
がて、小瀧とよざる、水原とよ、萬年
寶永三年丙戌五月、正安寺十三世号智雄
了察和尚とて、西瀧石碑立、中御門院の
山代之丞、僧智雄、毛左、巖とよから、水とよて
瀧と作り、此も其僧のとよひ、興福寺の仲等大徳
ひうかくもとの正寺とて、すま正庵寺とて

弘治二年と二百五十年をすとすまざうせり
やく、苗代澤とすがは智雄和尚の瀧とおとせ
流ひうち井堰よひま、ソ復田を作り人集めと確
の徳とあらうとめぐめ多き法師あるを
時も苗小用小苗代澤水とすむせても、
事と民竹、大樹の木ふれを嘗て種のうも
そ緑とすか金とぞむれ。
すあらわ色も名も白くしれのうす
かの瀧ゆみ開居山といふものゆゑどすみ
いふ。石のむかとてすがは僧伽利と埋め盡せ
めがうあれど此名跡もえうをかんづかうて度度
の付と取て西人をあらはむひびくあるほども高。

ちくちくとすむすら火のまゝうへとてありのま
風と吹きぬれも草かみや亂との手あまの時
あら所とありぬ夜きりびるくにとてえましと、お
あきわせくてとせりともすとさりともまうじと
あれの扇織つれと、われてのむとおれを、正安寺
の御佛のまゝおゆく明るく、ゆくひじら
お左のやうも塔うほしと鐵銅の毘沙門天王
のみとうち形をとる、河伯面かとぞまくしてそれ
見ておもひよしからみうけとて、おもひて
背かで虚の渡の浦とおもひておもひて風情を
うじ、杜舟とよであれ。

おもひのまゝ日暮をぬみ草やとぞ

雪小暮に立ちぬれ森とす、杜丘のやうすを追う、
みちのまづの暖櫻もくぼのむらひつんあはるすまう、
薔薇のさふまわとせんじくをゆめ枝のさくら
乳もまさらやくも豊國もくもくとし椿山ちゆめ、
菜園の桜とてあて壁と壁う、夕暮ととよしとす。

十九日より停代よいかとく

山をよぢりて山へかくらむて山へんより、
山のものと、タつて山へんよりある。
廿一日、宿泊めぬしらうまのりあがしれども、くと
あり牛壇頭頬の桃見るを、鹿之角の渡りて、
唐津中路とあこまうりびとえしべくひととぞ、
写栗佃の里の家にすむきうるまきくまきくまきくま

桃のむらむらもうともともとれゆす、盛るる年
りとあん畑のまちうと金の畔垣すみいみ
らむとす八重櫻とがくと道くわせ花もくはく
いめくわく一見不山とおみつんまのと、月星方
やく、ゆみす、荒牧、小千秋、あとすらうすとす
描、長恨とよ風歌ゆえ、らやすきとくと轟玉は
山をもとみれ雲うと鶴、李山梨の雪うとしもす
桃李千机錦、江山一画屏とそし、ヰの仙人
の桜家あくらむ、牛と桃林の野小放つて牛首犢
さすをもとむらし桃園でのくとて海りとあく、
おととおととおととみうりとせ壁くりの
花のまこと、まこと相澤光由とすうつむく

やの人の住處をさへいはず本抜けつて
りの花紅 照井象賀の
うららかのよしとあらか仙人のよき道久
桃のともやの伊藤祐友の
やく人ぢまくわくぬしうよもかよまなれ
ゆの花はましめんえしがく月星の枝が
宵ふる所の山のまがまゆのまゆも桃櫻
の色まく酢醤花の色まくはくわくまく
本願の村が歩き林道の、鳥の声、桃植へ桃多く
ありて、とく牛津首戸とまのひづるをまわる
廿四日、相澤光武よりか車、口の花すらうる
見えど、宿のむかし伊東さにうそとまく、宿

出で仁井田の宿をあく、偏勝寺の船繫の櫻あま平
世昌齋櫻あまつまれるらまじ櫻山移あまつまち
まく見つ門であれ、播磨寺とよすはまくの宿の
井の口を、あるは重櫻の咲く

誰れもかくまつせせとこほみとくつまん
花のや水、とうづくれども哉すれ井の口とよ
うく桜しきゑくとく

花の咲くとくとくおとと黒人びとひてゐ
えむとくとく、大伴の坡とくとくはくはくとく
ありて伊東じよねじつひ、椿山よきうげの根
季忌宮の祭とて霧島あらか、くまづ群れあらか
うる皆とくとく、渾御まほほひ、名附の古城あらか

櫻のうららりと今よ畢竟の丁度り故く
山の名は多勞よじせひくうふともむと傳ふ
主乃花多、れぬもあくもぞのぬくやけの
うき橋のうつみをとくめひく
花の枝の色とさかひとねとゆる山の日出
暮りづけ、とすい此幕まくやとうき
廿六日、もつてよう馬を出立ち橋の川とまく
はくとくとくとく、落花如雪馬蹄奮
樹黄鶯欲斷腸行到小橋春影碧石一
溝清水浸垂楊とよのうのうかく
そく馬とくとくとく、光武と別れとく

破損あり

21/21

